



世界遺産・富士山

それぞれの人に、それぞれの富士山が棲んでいる。私が初めて富士山を意識したのは、東映の時代劇のワンシーンである。山陰の片田舎で育った村に、年に4～5回やってくる巡回映画が、歩いてすぐの公会堂で上映された。大川橋蔵、中村錦之助、大友柳太朗の全盛時代だった。「新吾十番勝負」や「一心太助」のシリーズ、「忠臣蔵」「清水次郎長」など東映オールスター総出演映画がとくに好きだった。クライマックスになるとみんな拍手して、身を乗り出して声をあげた。

これらの時代劇に決まって出てきた場面は、富士山に青空、茶畑に茶摘み娘がにっこりして、その道中を橋蔵や錦ちゃんが手をふって歩いていくシーンだった。スクリーンいっぱいに映し出される富士山に圧倒された。10歳のころだっただろうか。



富士山を肉眼で初めて見たのは、中学校の修学旅行のときだった。箱根経由の東京見物がそのコースだったが、一泊した箱根から見た富士山が最初だった。その明るる年、私のなかの富士山が人生のターニングポイントになった。

イタイタイ病や水俣病が社会問題化していた時代だった。NHKのドキュメンタリー番組で富士山の大沢崩れが特集された。日本の象徴である富士山が崩れていく、日本人の心のふるさつである富士山が壊れてなくなっていく…「僕はどうすればいいんだろう」富士山は私の心に衝撃的に映った。なにかを創造していくことを将来の道としておぼろげながら描いていた「僕」は、「建築」ではない「環境設計学科」をめざそうと、そのとき決めた。15歳のときだった。



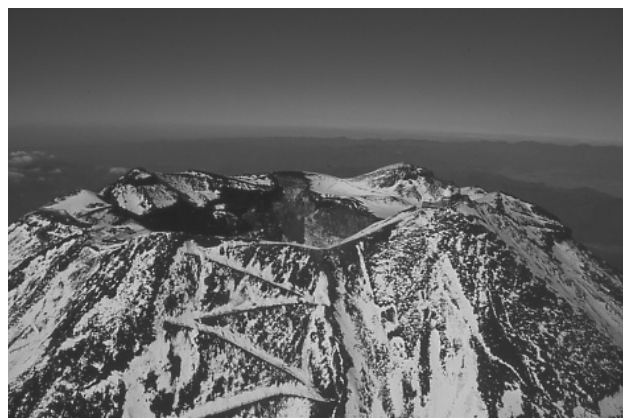
それから10年後、私は富士山がよく見える静岡の地に降り立っていた。そして静岡に住みはじめていた。思ってもみないことだった。しかし、静岡県は富士山、浜名湖、伊豆半島、自然と歴史、東海道、こんな魅力のある地域はないと自らが選んだ場所であった。



昭和54年、静岡県庁に入って1年目に出張で富士山に登ることになる。当時、ゴミ問題と山小屋のトイレの改善が求められ、富士山クリーン作戦が展開されていた。出張は山小屋のトイレの実態調査だった。須走口からゆっくりと登り、8合目で宿泊して翌朝頂上に達した。富士山に仕事で登るとは、思ってもみないことだった。



もう一つの出張は圧巻だった。富士山を空から越えたのだ。平成11年、静岡国体開催のための企画準備室に配属された私は、国体競技の開催会場を空から視察することを命ぜられた。静岡基地を飛び立った防災ヘリは大井川を北上し、本川根から東へと向かった。富士山の大きな塊が徐々に近づいてきた。眼下に迫り、目の前に大火口を見たときは少しの畏れを感じてしまった。富士山より高いところから富士山を見下ろすとは、思ってもみないことだった。富士山上空は乱気流のため、防災ヘリといえども近づくことは危険なのだが、その日の穏やかな気象条件が幸いした。噴火口を左手に見て旋回し伊豆半島へと向かったのだった。



富士山を3,800mの上空から見下ろす 1999年12月 撮影@塩見寛



私の針路を動機づけた富士山が、いま近くにそびえ立っている。こどもの頃から変わらずにそこにある。人々の心のなかに棲んでいるそれぞれの富士山は、これからも変わらずに存在し続けるだろうか。

塩見 寛（静岡地区）景観整備機構